

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### 研究経過報告 ——'89年秋～'90年夏——

小 嶋 秀 夫

〔発達、発達研究と歴史・文化的条件〕 日本発達心理学会第1回大会（白百合女子大学，1990年3月）で，発達研究と歴史的視点というラウンドテーブル・セッションを企画し，また司会・発表をした。これはかねてから筆者が願っている，発達に関心のある歴史家と歴史に関心のある発達研究との共同作業の可能性を探る第1ステップであった。予想を上回る参加者があったほかに，事前に依頼しておいたメッセージが，国内12，国外3人の研究者から寄せられ，33枚からなるメッセージ集を当日配布することができた。メッセージの中にあった G. H. Elder, Jr. 教授（University of North Carolina at Chapel Hill）の「歴史的視点を発達研究の重要な部分とするためのいちばん有用なやり方は，学際的なチームでよりも個々の研究者の頭の中でそうすることだ」という意見は，アメリカにおける学際的研究に参加した体験を基礎にしているだけに重みがあった。わが国の発達研究者の中で，自ら積極的に歴史の勉強をしたり，直接に1次資料の分析に取り組んでいるものは極めて少数である。しかし，発達研究者側での歴史への関心の裾野の広がりを確認できたことと，歴史とその関連領域での専門家の一部が，歴史的発達研究に対して，厳しくかつポジティブな構えをもっていることが分かったことは収穫であった。この問題は，すでに採択が決まった来夏の ISSBD 11回大会でのシンポジウム，Historical developmental psychology; Organizers: W. Koops (Vrije Universiteit, Amsterdam) and H. Kojima での論議につなげるつもりである。

また，上記の発達心理学会でのシンポジウム，「発達心理学における国際比較研究の意味」で，話題提供をした。

なお，昨年に触れた ISSBD 10回大会での招待講演を基にした論文，Family life and child development in early modern Japan は，*Zeitschrift für Sozialisationsforschung und Erziehungssoziologie*, 1990, 10, 314-326. に掲載されることになった。

また，近世日本の子育てにおける自己制御と身体性を扱った論文，Auto-regulation dans la façon traditionnelle dont on élève les enfants au Japon（英文で書いたものが仏訳された）が，C. Garnier（編）の本の1つの章として，この秋にもカナダの出版社から出ることになっている。

〔児童発達観の研究〕 この領域の考察に関しては，「児童発達観と心理学」が，特別論文の形で，児童心理学の進歩，1990, 29, 215-236. に現れた。

〔人生段階の研究〕 この領域に関しては，次の2つの論文が現れた。「中高生から見た老年期」青少年問題研究（大阪府生活文化部），1990, 39号，11-27.（小嶋秀夫・田尻教子）；「子ども」の概念」青少年問題，1990, 37, No. 5, 4-12.

〔家族関係〕 きょうだい間の呼称から乳幼児期の親子・きょうだい関係を分析した結果を，本学部における文部省特定研究報告書，1990にまとめた：「乳幼児期におけるきょうだい関係の発達——きょうだい間の呼称関係——（河合優年・小嶋秀夫）。また，さらに分析した結果を日本教育心理学会第32回総会（1990年10月，大阪大学）で発表する（小嶋秀夫・河合優年・森下正康・村上京子）。母性・養護性の問題は，こころの科学，1990, 30号（小嶋秀夫・大日向雅美（編））で扱った。

〔その他〕 前年に予告していた次の2冊の本が実際に現れた：小嶋秀夫『子育ての伝統を訪ねて』，新曜社，1989年10月；小嶋秀夫（編）『乳幼児の社会的世界』，有斐閣，1989年10月。それに次のようなテキスト1冊と，別のテキストの1つの章が現れた：小嶋秀夫・速水敏彦（編）『子どもの発達を探る』，福村出版，1990年3月；「発達研究の方法」無藤 隆ほか（編）『発達心理学入門Ⅱ』，東大出版会，1990年2月。

また入学試験研究の領域では，村上 隆氏と共同で，若干の発表をした。

（1990年8月17日）